

日本ソフトボール界の現状に関する研究
The Study on The Circumstances about Japanese Softball

1K08B051-8 柿本太郎

指導教員 主査 平田竹男先生 副査 中村好男先生

【序論】2008年の北京オリンピックでは見事優勝し世界一に輝くことができたが、2012年のロンドンオリンピックでは正式種目から除外されることが決定している。わが国のソフトボールを取り巻く現状は非常に厳しく、オリンピックから除外された競技に魅力を感じなくなった競技者や愛好家が減少し日本でのソフトボール競技がますます小さくなっていく可能性も否めない。この状況に基づき、本研究ではまず日本ソフトボールがどのように発展していくべきなのかを分析することが重要だと考え、研究対象として日本ソフトボール協会と日本代表チームを取り上げ、戦績や経営面など様々な要素において、現状の問題点を抽出し、それらを改善するための施策を提示することを研究目的とした。

【方法】日本ソフトボールの問題点を抽出するために平田、中村（2006）が提唱するトリプルミッションの概念を用いて「勝利」「普及」「市場」それぞれの現状を研究した。

【結果】日本ソフトボールをトリプルミッションの各概念に当てはめ、「勝利」については男女別に各国の世界大会の成績を出し、日本代表と各国の成績を比較し、日本代表の活動について分析を行った。分析した結果、男子に関しては代表の活動が少なく世界の上位国とも差があることが明らかになり。女子に関しては代表の強化日程も充実していてアメリカと常に優勝争いをしているが世界一になったのは一度だけであった。「普及」については都道府県別と登録種別の競技人口と北京オリンピック時のテレビ視聴率について分析した結果、各都道府県によって登録している競技人口に大きな差があり、埼玉県が最も競技人口が多く男子は大都市の周辺の県、女子は大都市の競技人口が多いことが分かった。また登録種別では高校が圧倒的に多く、特に高校女子の競技人口が非常に多いことが分かったが、一方女子は高校以上の年齢になると競技人口が急激に減少する

ことが明らかになった。視聴率に関しては決勝戦が放送された時の視聴率が30.6%で開会式に次いで全日程の2位の視聴率と獲得しており、ソフトボールという競技自体は視聴率がとれない競技ではないということがわかった。

「市場」に関しては事業収入と事業支出の内訳を整理し、オーストラリアとの収支状況との比較を行った。オーストラリアは毎年黒字を出しながら経営しているのに対し、JSAは年間4000万ほどの赤字を出しながら経営していることがわかった。また日本の収入の多くは登録料によって賄われていてオーストラリアは助成金によって収入を得ている。支出の多くは国内競技会事業と代表の強化費に使われていることがわかった。

【考察】これまでの研究結果のもとトリプルミッションモデルに日本ソフトボールを当てはめ、課題の抽出とそれに対する改善策を考察した。「勝利」では男子代表の活動日程を増やし日本特有のソフトボールを作り出し世界強豪国に対抗できる実力を作ること、そして女子に関してはオリンピックから除外されても定期的に代表の強化し今以上の実力をつけるアメリカに勝てるチームを作ることが求められる。そして「普及」に関しては競技人口の少ない県での大会の実施、登録方法の改善、マスコミやインターネットなどのメディアの利用など今まで取り組んでいないことに取り組むことが必要である。「市場」に関しては今現在ある赤字改善のためにオーストラリアの収入状況を参考にして助成金をもらうなど新しい収入源の確保や日本リーグの入場料収入を増やす努力をすること改善策として考察した。

【結論】ソフトボールをより日本で普及させるためには、「勝利」「普及」「市場」に関して現状をもう一度見直し今まで挑戦したことのない新しいことに取り組み日本ソフトボールのトリプルミッションモデルを好循環させることが必要だという結論に至った。